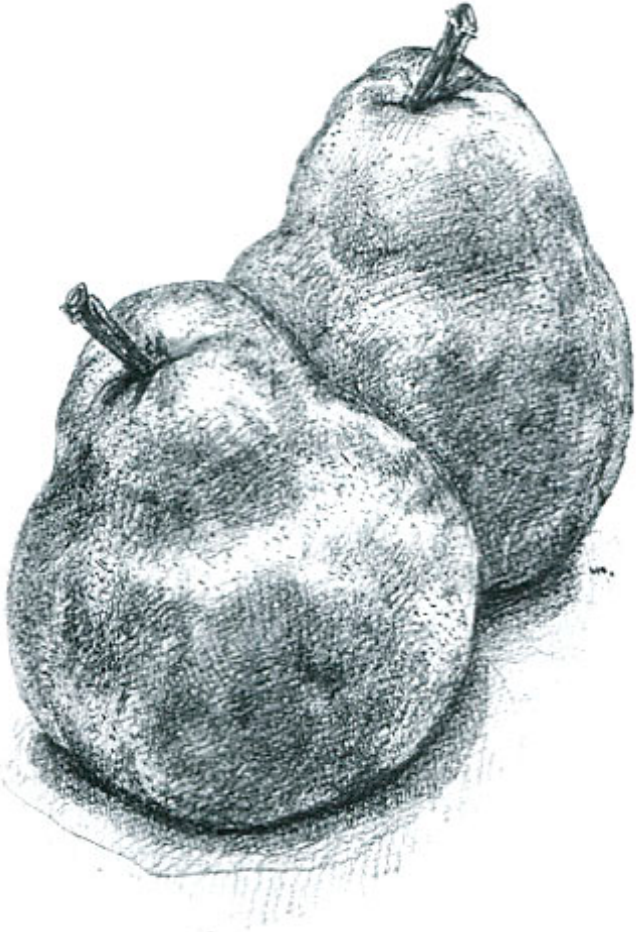
昭和43年7月1日第3種郵便物認可
平成22年11月5日発行（毎月5日1回発行）
第50巻11月号（通巻616号）

風土



11

柚子釜　神蔵器

名月やゴッホの杉の炎立つ

名月や大河は大河底流れ

雲早し子規忌の月も十二日

桂郎の眼のかうかうと穴惑

師の墓に十歩離れて芋の露

PDF= 俳誌の salon

みちのくは豊年夜々のいなびかり

咲き充ちて供華にはならぬ曼珠沙華

星流るわが頻脈の百五十

心臓へくすりのとほる白露かな

離山房

さらさらとさらしな升麻ジョン・レノン

くわりん貰ふ権僧正の大きな掌

柚子釜やありありと師の来てをりぬ

PDF= 俳誌の salon

竹間集

同人作品

星月夜

柴田　久子

渓川の風が生み出す赤とんぼ
新しき箒の重し今朝の秋
銅山の町の鎮もる星月夜
八月の使ひに渡る東京湾
八月の牛のさびしき貌に会ふ
ゆつたりと括られてゐる萩の風
走り蕎麦水は水車を駈けのぼる

涼新た

中村　洋子

雷鳴の過ぐるを待ちて門火焚く
立体に飛び出す絵本初嵐
涼新た衣桁に掛かる白薩摩
白木槿芯まで白し人を恋ふ
米すこし雀に撒きて終戦日
鳥の発つ一樹八月十五日
休暇明け砂のこぼれてゐる畳

高野の月

橋添やよひ

藷の飯炊いて八月十五日
天を突く杉や高野の月涼し
秋蟬の沁みる秀次自刃の間
南無大師立体曼荼羅涼しかり
聖域のさしみ蒟蒻鬼貫忌
黒揚羽力抜くとき裏返り
万緑の高野の襞やむらさきに

PDF= 俳誌の salon

ひづめ跡

南　うみを

清水出てたちまち露の薬缶かな
地蔵会の莫莚を船虫走り抜け
朝顔のはなびら歪め熊ん蜂
ひづめ跡踏み秋蒔きの水を汲む
あきつ飛ぶ空にきざはしあるごとく
千枚田稲刈る顔のぬつと現れ
麻紐がもつれてならぬ野分雲

水中花

島谷　征良

歩く姿誰かに似たり天道虫
ラムネ瓶手にずつしりとなつかしや
とある店とある女の水中花
冷奴酒あつくしてみたくなり
涼しさや海は見えねど海の風
目の力がくと衰へ暑気中り
また海へ出かけてゆきぬ日焼の子

夜の秋

大竹　淑子

大海の沖指す揚羽漆黒に
合歓の花みづうみは海とほざけて
六畳の四隅に籠る炎暑かな
露涼し寺の祭を昨夜にして
鉄瓶に湯の沸く音や夜の秋
老杉の走り根あらは晩夏光
摩尼車ひたに廻して涼しかり

葛の花

宮川みね子

仏界へつづく道なり葛の花
つくつくしほふし黄泉もつくつくほふしかな
むさし野に横穴墓群秋あかね
おしろい花夕べの風と変りけり
秋の星空へ抜けゆく渓の音
ひぐらしや硯にすこし水を足す
一節の竹の花入れ露けしや

PDF= 俳誌の salon

夕　月　夜

― 橋添やよひ―

大文字の護摩木は楷書一行に

盆の風戸毎に去年の燠を吊り

奥の院の千人塚やつくつくし

弘法の風てふ涼し銀閣寺

密教の遺せしものに大文字

慈照寺町松を大事と送り盆

大文字果てて残りし七日月

かなかなや糺の森の古書祭

荒雨の早き夕餉の祭鱧

列柱の影透きとほる夕月夜

PDF= 俳誌の salon

山河集

同人作品

神蔵　器選

夫見舞ふ庭の涼しき風を持て　安永　圭子

爽やかや深く聞かれず別れけり

ミロの絵の染まるTシャツ避暑地かな

破芭蕉となりしも庭の王者たり

愛犬の白髪（しろかみ）ちらほら秋の暮

汲置きの水沸きにけり原爆忌　林　いづみ

遠き帆にこころたゆたふ晩夏光

篝火の先へ先へと徒歩鵜かな

赤とんぼ小学校に龍太の句

百日紅通ひつづける母が許

八月の空に入りたる奥穂高　根岸　善行

足場外されて我が家や秋の立つ

この世とは自分の家や昼寝覚

一重瞼二重に秋の暑さかな

ポストまで二三分なる残暑かな

夕べより朝がよかり苔清水　柿沼　盟子

登山靴のリズムを刻むがれ場かな

赤とんぼ止まれる水を買ひにけり

貝に聞く夏の終はりの風と波

バス停の傾ぐベンチや虫すだく

我に娘に旧姓のあり盆が来る　十井ゆう子

迎火に一瞬風の来たりけり

小学の男の子二人と墓洗ふ

夫寝て月下美人の咲く予感

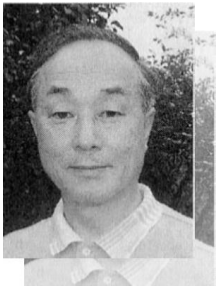
のけぞつて月下美人の開ききる

PDF= 俳誌の salon

朝ざくら

間島あきら

綿虫の飛ぶや三時の狐川
木守や瀬音に眠る峡の里
空頒つ白根三山鷹一つ
深葱や裏山を撃つ発破音
杣の日に勢ふ冬の金魚かな
水音へ傾くこころ冬すみれ
蒲団干す連山の間いとほしみ
水ぎはの一所日当たる十二月
夕日堰く水にこゑ立つ開戦日
大年の月のうてなにゐて一人
外灯の傘の三角雪もよひ
ふろふきや明日の次第をなぞりゐて
寒林の蔭せめぎ合ふ地にちから
葦芽やひかり原初のままに在り
風光る地生るるものに先駆けて



PDF= 俳誌の salon

第 33 回桂郎賞俳句部門入選

ひねもすの山家は春の音の中

梅開く日の温むるひとところ

梅月夜身は一本のひかりなす

山の抱く小さき日溜り犬ふぐり

春分の水の動かす水の底

燕来る刎木二本の渓の空

順に折り確かに十指山笑ふ

牡丹の芽山のあなたに黄泉の国

掌に余す星やかつての蚕飼村

引鶴や天へ水音山の音

初ざくら高空の藍恋ふやうに

泡一つ残す現し世朝ざくら

満開の花蒼天の弛みなし

蝶飛んで身ぬちの熾火燃えたたす

たかんなの伸びゆく天の高さかな

PDF= 俳誌の salon

◇特別作品◇（抄）

月の道

森屋　慶基

どこまでも一本道や稲は穂に
なにもせずひとつ揺れをり吾亦紅
踊るやに狐の剃刀立ち並ぶ
稗を抜く田の一枚や寄せ太鼓
端縫（はぬ）ひ小袖秋の初風藍に染め
締上げて端縫ひに緋色踊り帯
母が手に端縫ひの着つけ水の秋
鏡中に母娘の踊衣装かな
橋渡りきつて一人や星月夜
この道もこの橋もまた月の道

PDF= 俳誌の salon

風土独語／神蔵　器

群鶴を研出す蒔絵今朝の秋　　近藤幸三郎

蒔絵の基本的な技法として、⑴研出し蒔絵、⑵平蒔絵、⑶高蒔絵の三種類がある。⑴の研ぎ出し蒔絵の工程は、次の六工程に分かれる。

1　置き目、葉筋、枝などの線描
2　粉蒔き、金・銀粉を蒔く
3　梨地漆による肌塗り
4　梨地漆で粉固め、三回ぐらい行う
5　塗り込み
6　研ぎ、炭で研ぎ、更に角粉（つのこ）で磨く

6の工程で下の蒔絵層を浮き出させて面を平らにする。

私は蒔絵の工房を見学したことが無いので、この句についても批評など出来ないが、工人たちは伝統は守りながら、さらに工夫を凝らし、より精緻を極めたものに精進し、まさにいのちを削っている。

いま工人が背を丸め、息を殺して研ぎ出しをしている蒔絵は、武帝記から「帝巡「干北辺」見」群鶴留止」」の図でもあろうか、金色の群鶴がかがやき、まばゆい。

夫見舞ふ庭の涼しき風を持て　　安永　圭子

「いい句というものは存外変哲もないものだ。表現の手柄が見えぬためだろう。――中略――しかし、もう憂一度を凝らして作品を眺めると、その奥にただならぬ作者の眼がひかっている。無駄なものをいっさい切り取った鋭い刃先がある。しかも料理に刃の匂いをのこさぬ」

これは、かつて「雲母」誌に載った龍太先生の「選後評」の一節である。古いことで、その時の句も作者の名も忘れてしまったが、私は座右の銘のように手帖に書き残していた。

ご主人のお見舞いに「庭の涼しき風」とは、何とも素晴らしい。第三者は口をはさむ余地はない。

たぐひなき鈴振る虫となりにけり　　林　いづみ

作者はもう十年にもなろうか、毎年、自分の家で鈴虫を飼い、孵化させ育てている。これは前年の秋の産卵から、長い土中の卵の越冬、孵化したもので、生れたての幼虫は煙のようなもの。茹で玉子を裏漉しにし、さらに指先で舐めるように日に何度も与えるとか、私には詳細は解らないが、兎に角、大変なことのようである。

鈴虫は古来、日本人には最も愛されたもので、講談社の歳時記などの『源氏物語』に鈴虫の巻があり、六条院の一部を野に作り、鈴虫を放って、風のすこし涼しくなりたる夕暮に、人々が集まって「げに、こゑごゑ聞えたる中に、鈴虫ふり出でたるほど、はなやかにをかし」とある。

PDF= 俳誌の salon

六条院の全国からよりすぐった鈴虫もさぞかし美しいものであったろう。しかし卵のうちから愛情をもって手塩にかけて育てたいづみさんの鈴虫の鳴き出したるは、さらに、いと美しく、たぐいない音色であったであろう。（以下略）

PDF= 俳誌の salon

風土集

神蔵　器選

かなかなや一人降り来る一輛車　横浜　近藤幸三郎

群鶴を研出す蒔絵今朝の秋

二度三度仏間に深くあきつ来し

曳き売の頼まれ物に茄子の馬

首失せし地蔵の天蓋百日紅

郭公や豆腐庖丁槽に置く　藤枝　間島あきら

蓮開く三歩離れて木のベンチ

ものを焚く炎色卯の花腐しかな

たましひの闇裏返す蛍の火

事の無き今日の一日や心太

背泳ぎの雲の流れに合はせゆく　東京　柿沼　盟子

ターンするプールの日の斑に手をつきて

避雷針太くありけり大西日

啞蟬の低くゆきかふ樹間かな

校庭の上向く蛇口爽やかに

美しき嘘のあとさきメロン喰む　東京　林　いづみ

帰り際触れゆく処暑の太柱

爽やかに一円相が床の間に

たぐひなき鈴振る虫となりにけり

干梅の火照りをさます軒の端

板チョコの腰の抜けたる残暑かな　東京　奥田　茶々

鈴虫の幼き髭のまま嫁ぐ

朝顔や夕べは明月の色を秘め

新涼の水に切り分けごま豆腐

新涼や美術館出てコンサート

冬瓜のほとけに出会ふ当尾かな　福生　雨宮　桂子

さざ波に鮴の傾く葉月かな

河骨や合祭殿に巫女ひとり

夏うぐひす躓きのぼる石だたみ

雷走る広目天の胸の罅

PDF= 俳誌の salon